

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成22年10月15日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 理学研究科

職 名 教授

氏 名 山 極 壽 一

事業区分	平成22年度・シンポジウム等開催助成		
事業内容	第23回国際霊長類学会大会 (International Primatological Society 23rd Congress)		
開催期間	平成22年9月12日 ~ 平成22年9月18日		
開催場所	京都大学吉田キャンパス		
成果の概要	別紙「成果の概要/報告者名」参照。 「成果の概要」以外に添付する資料 無		
会計報告	事業に要した経費総額	42,545,803 円	
	うち当財団からの助成額	1,500,000 円	
	その他の資金の出所	日本学術会議、科学研究費補助金(公開促進経費)、日本霊長類学会、東京倶楽部文化助成、11団体・個人の寄附	
	経費の内訳と助成金の用途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場使用料	5,459,853	
	登録管理、演題処理、ホームページ制作管理	4,730,649	1,500,000
	印刷、製作物、それらの郵送料	7,468,141	
	クレジットカード、銀行手数料等	812,310	
	寄付金取り扱い経費(JNTO)	531,000	
運営要員、機材等	10,248,415		
招待講演、途上国参加者渡航援助	6,805,585		
事務局費	6,489,850		
合 計	42,545,803	1,500,000	

## 成 果 の 概 要

京都大学理学研究科 教授 山極壽一

霊長類学は、人類学の一分野であり、私たちヒトが含まれる分類群である霊長類を対象として、その社会、生態、認知、生理、遺伝、形態、保全などを、自然科学だけでなく人文・社会科学とも連携して多面的に研究する学問である。霊長類学は、人間についての生物学的理解における重要な分野であるとともに、多くの霊長類が熱帯地域に生息していることから、急速に失われつつあるアフリカ、東南アジア、南米の熱帯雨林における生物多様性の保全にも密接に関連している。この度の第23回国際霊長類学会大会は、「霊長類とヒトの共存」をメインテーマに、研究発表と討論が行われ、霊長類学の発展に寄与するとともに、生物多様性の維持に貢献することを目的として開催された。

招待者も含めた参加登録者は、57の国と地域からその数1,026名に及んだ。うち日本人は248名と最多だが全体に占める割合としては24%に過ぎず、じつに国際学会と呼ぶにふさわしい値を示した。ちなみに、2番目はアメリカの245名で以下イギリス103名、ドイツ63名、フランス34名と続く。また、アフリカからは南アフリカ9名を筆頭に13カ国46名、日本を除くアジアからは中国24名を筆頭に16カ国127名、中・南米からはブラジル24名を筆頭に6カ国44名が参加した。うち10カ国15名は、大会運営委員会が旅費、滞在費、参加登録費の全額を負担して招聘した。

大会初日の9月12日13時から登録受付が始まったが、レセプションが始まる17時が近づくに従って徐々に参加者が集まり、サプライズ企画として行われた雅楽の2度にわたる演奏でその盛り上がりはピークを迎えた。翌13日午前冒頭の開会式では、唐木英明日本学術会議副会長、高畑由起夫日本霊長類学会会長、松本紘京都大学総長からご挨拶を賜り、菅直人内閣総理大臣のメッセージが披露された。以後17日夕刻のIPS総会までの間に、プレナリー・レクチャー7題、シンポジウム57件403題、ワークショップ12件、口頭発表302題、ポスター発表135題の研究発表が行われた（キャンセル演題除く）。このうち、保全関連の発表は、シンポジウム10件、ワークショップ4件、口頭発表50題、ポスター発表20題を占め、少なくとも数字の上ではメインテーマとして掲げた「霊長類とヒトの共存」について活発な議論が行われたことを示唆している。また、15日夜に新しい試みとして行われた学生懇話会は、ふだん世界の最先端で活躍している霊長類学者と面識のない学生や若い研究者たちとの交流の場を作り、将来の研究分野や研究対象を選び、共同研究や活動の場を得るために活用してもらうことを目的とした大学院生企画のワークショップであった。若干名の非登録者を含め62名の学生たちが5つの学問分野に分かれて円卓会議の形式で活発なグループ・ディスカッションが行われ、これからの霊長類学を担っていく若手研究者にとって有意義な時間となった。17日夜に催された約400名が参加し

たバンケットは、外国人にとっては慣れない座敷にて会席料理が供されたが、予想に反して大きな混乱がなかっただけでなく、出し物の声明のおかげもあって好評のうちに幕を閉じた。また、18日午後には、「暴力の起源とその解決法」と題した一般市民向けの公開講座が開催された。江崎信芳京都大学副学長からご挨拶を賜ったあと、企画者である山極壽一による趣旨説明、リチャード・ランガム博士の基調講演、日本人研究者2名の講演と続き、4名の討論者を交えて自然科学のみならず人文・社会科学や宗教（キリスト教と仏教）の立場も踏まえた議論が行われ、約200名の一般参加者にも満足して頂けたようであった。

以上の大会期間中の主要行事のほかに、2件のプレコンgress・シンポジウム/ワークショップ、3件のポストコンgress・ツアー、ならびに会期中のエクスカーションが3件行われた。霊長類研究所のある愛知県犬山市で行われた「霊長類とヒトの共存」をテーマとしたプレコンgress企画のうち9月6~7日は、講演5演題とポスター発表40題からなるシンポジウム、8~9日は東南アジア諸国8カ国からの招待者29名を対象とした5つの演習コースに分かれて技術習得を目指すワークショップ、10日は同招待者対象とした霊長類研究所、ならびにリトルワールド施設見学がそれぞれ行われた。他方、京都では8~12日に事前に人選した参加者11名を対象とした恒例のトレーニング・プログラムがIPS保全委員会の主導にて嵐山モンキーパークを実習場所にして行われた。ポストコンgress・ツアーは、宮崎県幸島、鹿児島県屋久島、宮城県金華山島の二ホンザル観察を目的に、いずれも18~21日の3泊4日の日程で行われた。参加者はそれぞれ16名、3名、4名と料金が高いせいか若干少なめであった。また、日本モンキーセンターを含む犬山市への観光ツアーは、27名の参加であった。他方、近場のエクスカーションでは、嵐山モンキーパーク207名、京都市動物園約100名、京大総合博物館33名と大勢の参加者が訪れた。